

希望を与える言葉

● 放 眼 日 中



最近10年ぶりに蘇州に行った。蘇州は上海から近く、日帰りで行くことができるため、宿泊する必要もないのだが、今回は工業園区に泊まってみた。ここは道も広く、渋滞もあまりなく、高層の建物も少なく、人々にもどこか余裕が感じられ、暮らすには快適な場所だと気が付いた。

その蘇州で26年ぶりに再会した人がある。王さん。筆者が上海留学中に日本語学科の学生だった彼女、その後どうしているかも分からなかったが、今年になり連絡が取れ、会いに行ってみた。当時は小柄でひ弱な印象だった彼女だが、今では自ら会社を経営し、立派な家を持ち、堂々とした老板（経営者）に変身していた。

彼女は日本企業と中国企業の間立ち、双方の欲しい物を探して紹介

し、結び付けるといふ貿易関連のビジネスをしている。筆者などは「日本企業の細かい要求を満たし、中国企業とのスピードの差などに苛まれ、さぞ大変なのだろう」と勝手に想像していたが、彼女からは「もちろんいろいろあるけれど、日中の違いを埋める、補う、それが私の仕事だし、私はそれが好きで、楽しんでやっています」とキツパリ言われて、心が動かされる思いだった。

いつから彼女はこんなに強くなったのだろうか。それとなく聞いていくと「この26年は本当に夢のようでした」と何度も言う。筆者も王さんが運転する日本車の助手席に座り、立派になった彼女を見るのはまさに夢のような出来事だったが、彼女がぼつりと言った言葉は衝撃的だった。「Aさんの言った『王さん、中国

はこれから必ず発展しますよ』という言葉を私は今でもはつきりと覚えていますが。私はその一言を今日まで信じてやってきました」

Aさんとは、筆者と一緒に留学していた当時、既に中堅銀行マンだった人だ。今では何でもない言葉のよう聞こえるかもしれないが、改革・開放直後の学生にとって先行きは全く見えないものだったので、先進国からやってきた日本人の言葉には相当の重みがあったのだろう。

筆者はその話を聞いてうろたえてしまった。正直に告白すると、当時、「中国が発展する」などとは全く思っていないかつたし、それどころか「この国の明日は大丈夫だろうか、さらに混乱してしまうのではないか」とさえ思い、その後の中国勤務の話で断ったほどだった。

ただ、同室だったAさんから、中国の将来についての楽観的な話一度も聞いたことがないことに思い当たった。全くの想像だが、Aさんも本日は中国の発展に疑問を持つていたのかもしれない。だが、王さんたち、当時の大学生には「私たちが国を背負っていく」という気概が感じられたし、日本の学生に比べたら驚くほどに勉強もしていた。そんな人に「あなたの国の未来は暗い」などと誰が言えようか。軽い気持ちで励ましただけなのかもしれないが、中国はここまで来てしまった。

現在、中国は急速な発展の結果、さまざまな問題を抱えている。是非「あなたの国はますます発展する」と運転席の王さんに言いたかったが、その言葉は日本の若者にこそ掛けるべきだと思ひ、のみ込んだ。



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。